

第 67 回リンドウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

所属機関・部局・職名: CNRS – University of Bordeaux, CBMN UMR5248, JSPS Oversea Research Fellow

氏名: 岡崎 豊

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

ノーベル賞受賞者の方々は、これまで数多くの講演をされているため、聴講者に何を、どのように伝えるかについて、色々考えてこられたと予想される。そこで、今回私が本会議に参加するにあたり、「講演スタイルと聴講者に与える影響について考える」というテーマを掲げて挑んだ。およそ30名近くのノーベル賞受賞者の方々の講演を聴くことができたが、様々な講演スタイルがあることがわかった。例えば Feringa 先生は、昨年ノーベル賞を受賞したフレッシュな受賞者であり、ノーベル賞を受賞した研究内容について紹介する形で話を進めておられた。聴講者側は、小説を読み進めていくような感じで、研究分野の発展の歴史と今後について、非常にわかりやすく話を聞くことができた。また、Lehn 先生は、受賞した内容というよりも、現在力を入れている研究についての話をされておられた。ノーベル賞の受賞がゴールではなく、受賞後も自分の思い描く研究を進めている様子が伝わり、強く感銘を受けた。Shechtman 先生の発表スタイルは上記の方々とは異なり、ノーベル賞を受賞した自らの研究内容である quasicrystal の話ではなく、一般的な結晶の話を研究者以外の方が聴いてもわかるように話をされていた。

今回受賞者の方々の講演を聴き、純粋に憧れの気持ちを抱いたと共に、①正しく②楽しく③魅力的に「伝える」ことの重要性を強く感じた。また、海外で研究活動をしていると、講演が上手な人が高く評価されるという場面に出くわすことが多々ある。これはおそらく、伝えることも大事な研究活動の一つであるという認識が根付いているからであろう。一方、日本は職人的な考え方が根付いているせいか、他の国と比べて「伝える技術」に関してまだまだ改善の余地があると思う。今後、自らの研究を①正しく②楽しく③魅力的に伝えることについても意識しながら、研究活動を進めていきたい。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカージョン等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

私は以前 HOPE ミーティングに参加させていただいた経験があるが、本会議では食事の時間等は基本的にノーベル賞受賞者とは別々であったため、インフォーマルな交流の時間は HOPE ミーティングと比べて非常に少なかった。チャンスが数少ない中、27日の Dinner (Grill & Chill) に Feringa 先生が来られていたため、お話しすることができた。Feringa 先生は、若手研究者のところに自ら足を運んでは話をし、若手研究者が喜んでいるのと同じように、先生自身も数多くの若手研究者との会話を楽しんでおられた事が、私の目には非常に魅力的に映った。

もし研究をスポーツに例えるならば、ノーベル賞受賞者の方々はイチローのようなスーパースター的存在といえよう。科学の発展のために、研究者を志す者を増やすには、ノーベル賞受賞者(スーパースター)の影響は非常に大きい。Feringa 先生の振る舞いは、その場にいた若手研究者たちに大きな影響を与えたことは間違いない。ノーベル賞受賞者ではない我々も、地域の小学生たちが集う科学教室やオープンキャンパスなど、今後研究者を志すかもしれない人達と接する機会は少なくない。そういった場面で、研究内容の魅力を伝えるだけでなく、魅力的な研究者と思ってもらえることが大切だと思う。Feringa 先生の振る舞いを見習い、研究内容の魅力のみならず、魅力的な研究者になれるよう努力してゆきたい。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

例えば、ディナーの時に話をしたメキシコのポスドクの方は、自国の研究が何を指して進んでいるのかを一生懸命アピールしておられた。研究内容や Scientific interest といった個人を中心とした視点ではなく、自国の研究という広い視点で話をされていたことに刺激を受けた。目の前の申請書や論文等に追われるのではなく、「人類にとって今後科学はどうあるべきか」、「日本はその中でどう進んでいくべきか」を考え、それを語れるようであればいいと感じた。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

今回日本から参加した7名は、それぞれ異なる研究のバックグラウンドをもっていたため、分野ごとの醍醐味や苦勞、達成感等の違いについて話したことがある。研究分野によって、こんなにも異なるものかと驚かされた。例えば、全合成を行なっている方から伺った、「こんなにゴールのはっきり決まっている研究は他にない」、「数十ステップの合成を経て目的の化合物にたどり着いたとき、地球上で植物と自分だけがこの化合物を合成できるのだという達成感を味わえる」などの言葉は、私にとって非常に印象的であった。今後大学等で研究及び教育に携わるようになった際、こうした研究テーマごとの醍醐味や苦勞、達成感等の違いを念頭に置いて、学生と研究テーマのマッチングを考える良いと感じた。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

1. の回答でも述べたが、今回私が本会議に参加するにあたり、講演スタイルと聴講者に与える影響について考えたいという視点で望んだ。そのため、私にとってもっとも良かったプログラムは Lecture である。午後の Young Scientists Discussions は、その日の Lecture で講演された方の中から選ぶことができたため、分野が異なる先生であってもどんな内容かわかるため非常に良い作りになっていると感じた。また、諸外国の参加者ともっとも話しやすい環境が作れたのは Dinner の時間であり、研究の話から日常会話まで様々な話がしやすい雰囲気であった。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット〔具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。〕

私が本会議の参加によって得られた成果は、これまでの1から4の質問の回答に示した以下の内容の重要性を実感し、考えるきっかけとなったことである。

1. 伝えることの重要性とその伝え方
2. 研究内容の魅力を伝えることと、研究者自身が魅力的であることの大切さ
3. 今後科学はどうあるべきか、広い視野で考えること
4. 研究テーマごとの醍醐味・苦勞・達成感等の違いについて、具体例を持って意見交換ができたこと

また、本会議では日本人枠で参加したのは7名(全体の約2%)であり、HOPE ミーティング(全体の約25%)と比較して非常に少ないこともあり、たった6日間であったが日本人同士の団結力も生まれた。分野や年齢は異なれど、こうした研究者仲間ができたことも、本会議の参加によって得られた成果である。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

6. で回答した、本会議の参加によって得られた成果について、まずは身の回りの研究者に伝えることが一つのきっかけとなりうらと思う。また、将来自分が教育者になった時に、学生たちにこの経験について紹介していくことで、より広く伝えていくことが可能になると思う。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

リンダウ会議への参加は、ノーベル賞受賞者の講演が聴けること以外の収穫が非常に多い。我々若手研究者は、休みをとる暇もなく研究活動を続けており、なかなか参加の時間も取れないと考える方も多いだろう。しかしそんな今こそ、科学はどうあるべきか、研究者はどうあるべきか、同世代の研究者同士で考え、意見を交換し合うことは非常に重要だと私は思う。

(以上の記載内容については、氏名と併せて、一部または全部が日本学術振興会 HP に掲載されます。)

リンダウ・ノーベル賞受賞者会議派遣事業
平成 29 年度 参加者アンケート

今後の事業改善の参考にいたしますので、アンケートにご協力くださるようお願いいたします。

1. 本事業をどのような経緯で知りましたか。(複数回答可)

- JSPS の HP
- JSPS のメールマガジン(JSPS Monthly)
- JSPS からのメールでの案内
- 所属機関からの案内
- 所属学会の HP、メールマガジン
- 日本人研究者からの案内
- 外国人研究者からの案内
- その他(具体的に: _____)

2. リンダウ・ノーベル賞受賞者会議に参加して、どのような影響がありましたか。(複数回答可)

- 学術的な視野が広がった。
- 通常の国際学会では得られないような助言を受けることができた。
- 国際的な場で研究活動を行いたい、という希望が強まった。
- 将来、大学や学会等でリーダーとして活躍したい、という希望が強まった。
- 共同研究等の持続的な研究交流のパートナーが見つかった。
- 自身を研究者として受け入れる研究室が見つかった。
- web やメールではなく、顔を合わせた議論や交流の重要性を認識した。

3. 他の日本人若手研究者にも本事業への参加を勧めたいと思いますか。

- はい
- いいえ

4. 本事業について改善すべき点や、本事業の認知度を上げるためのアイデアがあれば、具体的にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。